

甥Yとの小さな冒険

寒河江芳枝

(大学教員)

これは、子どもがいない伯母（筆者）が甥Yと三年続けてデイズニーランドへ遊びに行った体験談であり、デイズニーランドは商品化された場所であると批判しながらも、一方で楽しんできたエピソードでもある。

甥Yは、二〇〇三年二月十九日に誕生した。家族にとっては、久しぶりの乳児であり、日々のYとのかかわりにワクワクした。彼は、二〇一五年四月から中学生になった。

二〇〇六年八月、舞浜の駅で降りて一番喜んだのは、筆者だったのかもしれない。家族連れがたくさん歩いている中、筆者は三歳の

Yの手を引き、デイズニーランドのゲートへと歩いていく。筆者は、出かける数日前から、着替えや救急道具、さらにはペットボトルを数本用意し、大きな袋の中に入れた。まるで海外旅行に行くような準備の仕方であった。当日Yが困らないように、かなりの物を用意した。そのため、荷物が入りきらないと、夫にも同じ物を入れた袋を用意する。

夫は、仕事の後に車でデイズニーランドに到着。筆者は、夫から連絡があると、Yと一緒に入り口まで向かう。その時、夫は筆者の姿を見て呆然と立っていた。なぜならば、夫

寒河江芳枝（さかえよしえ）

白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程在籍。昭和女子大学人間社会学部初等教育学科非常勤講師。著書：「プロジェクト型保育の実践研究」（共著、北大路書房）他。

と同じ大きな袋を筆者も持っていたからである。夫は冷静な声で、「こんな荷物を持つてゐる人はいないよ。泊りでもないのに。一つ（袋を）車に置いてこようか？」と言うものの、筆者は「Ｙに何かあったら大変！」と言ひ、パークの中へ再び向かう。Ｙは、私たちの顔を見ながらキョトンとしていた。パーク内は広いため、ベビーカーを借りたが、Ｙは乗らず、ベビーカーに乗ったのは二つの大きな袋だった。

Ｙは初めてのデイズニerlandという場に驚き、ゴーカートも遠くから見ていただけだった。筆者が「Ｙ、乗りたいの？」と尋ねると、「ううん、見るだけ」と答える。しかし興味はあるようで、他の場所に行こうと話しても、じつとその場でゴーカートを見ていた。パーク内では、キャラクターに出会う。筆者が「Ｙ、ミッキーさん。一緒に写真を撮つ

てもらおうか？」とはしゃぎながらＹに言葉掛けすると、Ｙは「怖い、怖い」と言いながら、キャラクターと反対方向に歩き始めた。

二〇〇七年八月、四歳児になったＹとデイズニerlandへ行く。行きは昨年と同様、二人で電車に乗って行き、午後から夫が仕事の後に車で到着した。この年は、筆者の弟夫婦からＹを預かっているという緊張した気持ちも少し和らぐとともに、昨年の経験も踏まえて二つの袋が一つになった。

夜のパレードが始まり、火花が上がる時になると、Ｙは「トイレに行きたい」と言う。筆者は、トイレの場所をお店の人に聞き、Ｙを抱きながら必死にトイレへ向かつて走る。

筆者は、Ｙが手を洗う時になると、自分のかかどが痛いことに気付いた。恐る恐る靴を脱いで両足のかかどを見ると、靴下は血で染

まり、靴擦れで皮が取れかかっていた。筆者は驚きとともに、両足を引きずりながらYと一緒に夫の所へ戻る。夫も筆者の姿には言葉も出なかつたようである。

夜空で花火がドンドン上がっている中、私はベンチに座り、Yがけがをしたら使おうと思っていた薬を自分の足に塗っていた。その姿を見ていたYは「ねえね（Yは伯母をこのように呼んでいる）、大丈夫？」と言う。本来ならば、筆者が「Y、大丈夫？ 痛くない？」と聞くはずであつたのだが……。

花火が終わると、夫はYを抱き出口に向かつて歩き、筆者は両足をひきずりながらその後を歩いて行く。何とも情けない姿だつた。

この年は、Yがゴーカートには乗りたいようだった。けれども、運転をするかどうかになると、「ねえねが、運転して」と言う。筆者がゴーカートを運転し、Yは周りを見たり、後ろから一人で運転してついで来る夫に笑顔

で手を振ったりしていた。

また、パーク内でキャラクターに会うと、自分の気に入ったキャラクターと写真を撮りたいようだった。けれども、自分からはそのキャラクターに近寄れず、「ねえね、一緒に行くこう」「写真を撮ってくださいと言って」などと筆者に話した。

二〇〇九年一月、五歳児のYとお正月明けにデイズニールランドへ行くことになった。この年は、デイズニールランドで遊んだ後、夜はホテルに三人で泊まった。ホテルのエレベーターのアナウンスは、ミッキーマウスの声である。Yは、「どこにミッキーが隠れているんだろう？」とエレベーターを見上げながら探している。Yは「きつと、ミッキーはあそこにいるんだよ」と天井を指さしながら筆者と夫に話した。

今回は、目が回るほど何度も何度もゴーカ

ートに乗る。運転はYが行った。スピードを出しながら声を出したり、カーブを曲がる所になると大声を上げたりして喜んでいた。

以前は、なかなかパーク内のキャラクターに言葉を掛けられなかったが、この時期になると、興味のあるキャラクターの方へ走って行き、列に並び写真を撮る。しかし、興味のないキャラクターになると、「○○は、気持ち悪い」などと話して次の目的地へと歩いた。

デイズニールランドという限られた場ではあるが、Yと過ごす中で、Yが自分の思いを徐々に相手に伝えられるようになっていく姿や、新たなものに挑戦し、楽しみを味わっていく過程を見ることができた。

筆者も初めは、Yにけがをさせてはいけない、どのようにしたらYが喜んでくれるかな？ と思う気持ちが強かったように思う。だ

からこそ、大きな袋を用意したり、自分の足から血が出ていたのもわからないほど、Yに真剣にかかわっていた。当時の筆者自身の配慮は、必要以上だったことを、Yとかかわり続けて学ぶことができた。それは大きな変化だった。

先日、すっかり大きくなったYと偶然駅で会う。両手に荷物を抱えた筆者を見ると、Yは「ねえね、荷物持ってあげる」と言い、筆者の荷物を持ってくれた。

今改めて考えてみると、子どもでもない伯母が、三年間にわたって甥Yと一緒にデイズニールランドへ行き、Yを楽しませようと思っていたが、一番楽しんでいたのはYではなく、伯母である筆者自身だったのかもしれない。

ところで、筆者は二〇一三年に人の子の母になった。わが子の育児に、甥Yとの経験が役立っている。